【香川県教育委員会教育長賞】

優しさの連鎖

香川大学教育学部附属坂出中学校　一年　籔内琥太朗

僕が小学校六年生の総合的な学習のグループ活動の時、「将来こんな物ができたら、きっと明るい社会になる」というものを作ってみよう、という企画をする授業があった。僕たちが考えたのが「みらい食堂」。車椅子を使う人たちのために階段をなくしたり、目が見えづらい人のために点字ブロックでの案内をしたり、障害者や高齢者などが利用しやすい食堂を考えた。しかし、ここ最近は考えるだけでなく、小さなことでも行動に移すことはできないだろうか、とずっと考えていた。自分の力を誰かのために役立てたくて。

そんなある日、コンビニエンスストアへ行った時のこと。そこに一人のおばあさんがいた。手押し車のような物を使ってゆっくりと歩いていた。足腰が弱い方だと思われる。おばあさんは頑張って入口の扉を開けようとしていたが、手が届かず開けるのを諦めて引き返そうとしていた。僕はとっさに声をかけた。「大丈夫ですか。開けますから入りますか。」と両開き扉の片方を開けた。おばあさんは、「ありがとう。」と言ってくれて入ろうとしたが、手押し車が引っかかって入れない。そして他にも来店する人がやってきた。僕まで一緒に困っていたら、店内にいた男性が気付いてくれて、もう片方の扉を開けてくださった。僕はすぐさま

「ありがとうございます。」

とお礼を言った。おばあさんも何度も

「ありがとう、ごめんね。ありがとうね。」

と言ってくれた。後ろに並んでいた人もニコニコしてだまって待ってくださっていた。見ず知らずの人の集まりなのに、完全に心がひとつ

になった瞬間だった。最高に嬉しかった。こんな感情初めてだ。しかし、何度も謝るおばあさんを見て、モヤモヤした気持ちになった。なぜそんなに謝るんだろう。もしかしたらどこに行っても申し訳ない気持ちで生活しているのではないだろうか。無意識に周りに迷惑をかけてしまっていると思っているのかもしれないと感じた。そうだとしたらとても悲しい現実だ。

今の社会、差別やいじめのニュースを耳にすることが増えてきているような気がする。というよりも、僕が意識し始めたのかもしれない。差別やいじめを減らそうと、組織として動く人だけでなく、無意識かもしれないが身近にも実行している人がいることを先ほどのコンビニエンスストアの件で感じた。まずは不自由なく生活できている僕たちが自然とサポートできる習慣を身につけないといけない。明るい社会を作るキーパーソンになるべく、自分たちが率先して困っている人の手助けをしたら、それを見ている他の人も同じように手助けをするようになり、連鎖がおきて社会が明るくなっていくと信じている。残念ながらいじめや差別も連鎖すると思う。誰もが人に優しくされると嬉しく感じるはずなのに、なぜ、みんながそうできないのか、大きな疑問で課題でもある。僕は温かい気持ちで相手のことを考えることによる連鎖によって社会が明るくなると信じているから、まずは僕がそんな一員になりたい。そして他の人たちにも訴え続けたい。誰かを支えられる人間でありたい。

今回コンビニエンスストアで中から扉を開けてくれた男性は、買い物中にもかかわらず助けに来てくださり、後ろに並んでいた男性も何も言わずに待っていてくださって、お二人とも視野が広く優しい方なんだと、すぐさま気付いた。最近明るいニュースより暗いニュースの方が多くなってきているように感じたり、自分たちが大人になった時の社会はどうなっているのか不安になったりもする。そんな中、素敵

な出会いがあったことで、まだまだ世の中捨てたもんじゃないと思った。僕も男性たちのような格好いい大人になって、どんどん手助けできるようになりたい。この出会いがなかったらこう思うことはなかっただろう。格好いい大人になって世界を明るくしていくのが僕の夢だ。